
ハロウィン企画「男女三人異世界物語」@妄想部

妄想部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハロウィン企画「男女三人異世界物語」@妄想部

【Nコード】

N9774X

【作者名】

妄想部

【あらすじ】

普通の高校生3人がある日突然、異世界に召喚されて頑張るお話です。

今回は匿名投稿なので、どの妄想部員が書いたものか予想するお楽しみ付き 解答編は明日11月1日18時に投稿予定です。詳しくは活動報告にあります。

ハロウィンの日

すらりと幅広の剣を鞘から引き抜く。

目前の敵へと構え、後方に控える仲間に見配せしつつ戦闘力を推し量る。

視えた！

「カズ、足止め！ ミツチ、目を狙え！」

大声で指示を出し、一足飛びに敵の懐へ入り込み弱点である箇所へ剣を振るう――！

「チツ」

あと僅かで剣先が届くという所で敵の攻撃が足へと向かった為、トンと軽く体を宙に飛ばし前方へ飛び退った。

「バカ田中！ 呪が完成するまで待ちなさいよ！」

「シンヤ、焦らないで下さい」

二人の文句は聞こえない。

鞭のような攻撃を上体を逸らしてかわし、「早くしろ！」と怒鳴る。

「よし、できたわ！ 『絡止縛』！」

「伏せて！」

カズが呪を放ち、ミツチが釘の形をした暗器を投げつける。

呪によって足止めされた敵は唸るような彷徨を上げるが、ピタリとその場に絡み取られて動けない。

そこへミツチの暗器がまるで吸い込まれるかの様に敵の片目に突き刺さった。

——ギヤオオオオオオ！！

「後は俺が！」

自由な上体は痛みのためか暴れ回って危険極まりない。ステップを踏み、敵の弱点を一気に切り裂く。

断末魔があたり一面の空気を振るわせた。

俺達三人は学校に通う普通すぎる高校三年生だ。

ちがう——だった。

俺は田中進也。たなかしんや

ミツチは、鈴木道重。すずきみちしげ

カズは、佐藤一葉。さとうかずは

男子二人女子一人、昇降口からグラウンドに出ようとした、ただそれだけの繋がり。

異世界トリップだといち早く気づいたのは俺。

ゲームや小説漫画、まさにそれと一致するのに興奮。

ミツチはただありえない光景に固まった。

カズは……女子ならではの冷静さをすぐに取り戻し、まずは衣食住といったのける。

考えるのは後、とにかく現実を見る——流石だ。

どうやら手違いで召喚されたらしい。

別の世界で一人の勇者を呼ぶはずが、何故か三人まとめて。

お詫びにとスキルアップの呪文を掛けられた。

すると、三人束になればその勇者に敵うレベルになった。

勇者は無事召喚され、俺たちは……。

「どうせ帰れないなら稼ぐしかないわね」

現実を見るカズの一言で冒険へ。

チートまでとは言わないが、力を合わせればレベルの高い魔物でも倒せた。

それから二年の月日が経った。

報酬などで潤って、城下町の大通り一軒家を購入。

店舗兼住宅のそれは、元は飲食店を経営していたらしい。
そこで燃えたのがカズだ。

「私、お菓子屋さんになるのが夢だったの！」

「カズ、君は不器用じゃ……」

「やあねミツチ。お菓子を作ることだとは言っていないわ」

カズは菓子屋の経営者になるのが夢だったそうだ。

ミツチは諦めが早い。溜息を一つ吐いてその先を促した。

「つまり僕が作るんですね」

カズは魔術、ミツチは盗賊、俺は戦士。そのスキルが特化している。

ミツチの器用さは料理にも生かされ、俺達の冒険の間とても助かった。

「私がオーブンの火とか制御するからさ」

「じゃあ俺はなにを？」

「シンヤは——」

「田中は——」

「用心棒」

あーそうですか。わかりますわかります。

体も顔も筋肉質な俺にはもってこいの役割だ。

こうして城下町に一軒の菓子屋が開店した。

口コミでどんどん客が増え、しまいには王城からお忍びで王族への献上品として注文が入ることも。

過剰には作らず売り切れ終いが基本な為、手伝いをあまり頼まなくて済むのがいい。

近所の娘さんを雇い、販売と製造に分かれて翌日分の仕込みと日持ちのするクッキーなどを量産する。

カズは売り上げの台帳を書き込んだりイベントを考えたりでいつも夜遅い。

異世界に男二人、女一人。

俺達に言えず色々抱えたままなのが気になったが、踏み込むには早すぎる、か。

あれやこれやと理由をつけてみるが、どれも底が浅すぎた。

黙って毎日カズの部屋の明かりが消えるまで、ドアの横に背を預け番をした。

「ミッチー！ 田中ー！ ただいまー！」

「わっ、カズ。何を持ってきたんですか」

「イベントの材料よ」

どうやらお菓子屋になくتهはならない季節イベントを盛り込んでいくらしい。

この世界は日本と似ていて四季がある。

しかし特に祭りらしい祭りがなくそれに関連付けた便乗商品が作りにくいので、変わり映えしないのがカズの気に入らない所だったようだ。

季節は秋。

芋に似た物や栗に似た物が次々運ばれ、ミッチはいつものように諦めた溜息を吐いた。

「それで……？」

カズがミッチと俺を手招きして声を潜める。

「私ね、オレンジカボチャがないか探してみたの」

「ハロウインの飾り、ですか？」

「そう。でもね……凶暴らしいわ」

「は？」

「えええええ？ 凶暴って……」

「この世界だと魔物扱いなのよ」

大きさはコンビニー軒分位で、蔓を使い攻撃をしてくる。

その蔓には毒があり、動きは素早い——と。

「ありえねえ」

「うん、頑張ろうね」

カズはつまり戦えといっている。

戦ってそれを手に入れるといっている。

まじか。

「んで、どうやって持って帰るん？」

俺の愛用の剣で余分な蔓を打ち払いカズに聞く。

「重さなくせばいいわよね」

そういつて呪を唱え、魔物のオレンジカボチャは地面から一センチ浮いた。

軽くロープを結わえて、俺達の店に向かって歩きながらふとした疑問を尋ねる。

「カズ、こんなデカイのどこ置くんだよ」

「王宮前の広場でいいって言われたわ」

「誰に」

「殿下」

「はあっ!？」

俺とミツチの声がハモる。

誰だ殿下って——殿下と言ったらこの国の世継ぎの王子だろう！自己ツッコミ乙。

「カズ、いつの間に？」

ミツチが尋ねると、カズはちょっと困った風に顎に拳をあて首をかしげる。

「なんかね、お菓子を直接届けるようになってから毎回会うようになって……」

暫く前までは使用人が来ていた。

それがなぜ手渡しに？

「いいじゃない。とにかくジャック・オ・ランタン作るんだから

！
明らかに追及の手を逃れようと話を畳み、カズはそれきり黙って歩いた。

カズの呪と俺の肉体労働とミツチの細工でカボチャお化けが出来上がった。

うん、上出来だ。

「ちよつとミツチ、田中、離れて？ 中に明かりを灯すから」
カボチャが腐らないよう固定、そして夜でもボンヤリと照らすような呪を掛けた。

王宮前の広場——王族のお披露目に民が集まる広場で相当広い——に、こうしてジャック・オ・ランタンが置かれた。

とはいえ、特に暦が同じというわけでもないから十月三十一日ではなく今日から二週間、みっちりハロウィンを盛り上げていこうと思う。

カズは算盤を弾き、ミツチは「トリック・オア・トリート」に使う飴やクッキーの量産に入った。この期間だけといいつつ近所の娘さんと夜遅くまで厨房で作業している。

俺は用心棒と言われたが、警備もよく機能している為出番らしい出番はない。

——潮時、か？

俺の居場所は最初からなかった。

二人に用心棒として、とは言われたが、俺が出る場面など一つもありえないほど平和だ。

仲良しこよしでいられると思えるほど俺の頭は能天気に出ていない。

食わしてもらっているとどこか心の片隅で小さく、それでいて抜けないトゲのように刺して痛い。

俺の役割はここまで。

幸い剣の腕はあるため、傭兵でもなんでもギルドに行けばそれなりの仕事があるだろう。

新しくパーティー組んで冒険に出てもいい。

ぬるま湯から抜け出したいんだ、俺は。

違う、俺は――。

「田中、ちよつといい？」

男の部屋を訪ねるには非常識な時間。

旅の装いをした俺にカズは目を丸くして息を飲んだ。

「え……？」

「俺、出てく」

「出てく……って、なんで！」

「店も軌道に乗ったし警備兵も定期的に巡回に来る。この世界にも大分慣れたし冒険に出よ――」

「バカ田中っ！」

どすん、と俺の胸に勢いよくぶつかる。不意を疲れた俺は尻餅をついた。

カズもそのまま引つ張られるように俺に倒れこみ、床に膝をついて抱きつくように手は首に回された。

「痛い！ 何すんだカズ！」

「バカバカッ！ 田中のクセにバカ！」

「田中のクセにつてなんだ！ 全国の田中に謝れ！」

「私の事好きなくせに！」

叩きつけられたそのセリフに俺はフリーズした。

……え？

「田中、私の事好きでしょ。なのに何で出て行く必要があるの？」

「ちよ、ま、」

どゆこと？

「大丈夫両想いよ。それから働く場所も用意してあるわ」

大丈夫って何が。両想いつて――。

「殿下に頼んであるの。しかるべき軍の組織に配属されるみたい」

えええええ！？

「だから、安心して？」

ゆっくりと近づいてくる唇。柔らかい感蝕にどこか納得する俺がいた。

――かなわねえ。

否定と現実と温もりと。

「毎日私が寝るまで扉の外で見守ってくれているの……知ってる」

備え付けのソファに膝を抱えるように座っていたカズは、俺の手からカップを受け取り温かい茶を一口飲む。

両手で包むようにして、湯気のゆらめきをじっと見つめた。

「私が頼んだわけじゃないし、ミツチにはそんなことしないじゃない。だからどうして？　って気になってたのよ」

自分のカップを手に、カズの隣に拳一つ分あけて座る。

「俺は……。お前がまだちゃんと現実を受け入れていないの知ってる。——まだ泣いていないだろ」

「……っ」

ぎゅっとカズは下唇を噛み、俯く。

「気を張り詰めているお前が心配なんだ」

「受け入れているわよ。だって、呪も扱えるしこうやってお菓子屋も……」

「ああ。でも根っこの部分ではまだ夢だと誤魔化してるよな」

「っ、そんなこと！」

「あるって。いいんだよそんな強がるな——馬鹿」

いつもいつも俺に対して「バカ田中」というカズの頭をくしゃくしゃと撫でた。みるみる間に瞳が潤み、「ずるいよバカ田中……」と横に座る俺の肩にコツンと額を寄せる。

僅かに肩が震え、小さく零す溜息には今まで気を張った分の強がりと一緒に吐き出されていった。

「よく……みてるのね」

「そりゃ惚れた女だからな」

バレたのなら隠したって仕方がないので開き直る。

異世界トリップ——高校生活を無難に送っていた俺達には常識すべてがひっくり返る出来事だった。三人の中で一番冷静に事を進めてきたのがカズ。

自分の気持ちは後回しにし、とにかく生きる術を探して。その緊張を解放することなく、いつもいつも張り詰めた気配がカズにはあった。ぷつりとその糸が切れたらどうなってしまうのか……。

俺は三人で魔物の討伐に繰り出していた頃から目で追っていた力ズに、解す役が自分であればいいなと密かに想いを育んでいた。

振り向いてくれるか不明だし、なによりミツチがどう思っているのかが気になるところであり。そんななか菓子屋を始め、経営者と製造者の二人は非常に上手く機能していた。つまりそういうことなんじゃないか、解す役はミツチなんだとあたりをつけ、静かに身を引こうと思っていた矢先の事だ。

「もう、戻れないのね」

「ああ」

「もう、この世界で生きるしかないのね」

「そうだな」

一つずつ確認していくカズに、俺はずっと付き合う。

これはカズにとって必要な儀式なんだ。

幾つも幾つも自分に言い聞かせるよう確かめ、そしてようやく気が済んだのか、心の奥に溜まった澱を吐き出すように溜息を吐いた。

「……よく見ているくせに、田中は私の事分かっていないんだ」

鼻をすすする音が止み、俺の服をぐちゃぐちゃに濡らした張本人が照れくさそうに顔をあげて笑った。ああくそ、可愛いじゃないか。

「うつせ、大体田中田中って！ ミツチと違って俺ずっと苗字じゃねえか」

それに二人まとめて呼ぶときは大体ミツチが先だしな！ 他人行儀だと思っだろフツー！

クスクス笑ってカズはカップをテーブルに置き、俺の片手を両手で包んだ。

「だから分かってないって言うのよ。その……ほら……」

顔を真っ赤にして俯くカズは、「は、恥ずかしくてっ！」と蚊の鳴くような声で告白した。

「そもそも……私、昇降口で一緒になったのは……田中に告白しようとしたからなんだもの」

「は……」

「田中が表に出る前につて焦ったからうつかり鞆忘れて、それを見たミッチが親切にも渡そうとしてくれて……」

それで、まさかの異世界召喚……。

「うーわ、ミラクル」

それしか言えねえよ。

つてゆーか、つまり……？

「カズ、ガッコ行つてた時から——」

「……うん。好き、です」

改めて。

カズは俺の目を真つ直ぐ見ながら、直球できた。潤む瞳で俺を見上げ、頬を染めながらの告白。

「馬鹿カズ」

「ば、馬鹿つて！」

「——俺にも言わせるよ、馬鹿」

握られていた手を解き、その手でカズの細い肩を俺に引き寄せた。

「お前は、俺が一番守りたい女だ」

頭に頬をそつと寄せる。

「俺だけのものになってくれ……一葉^{かすは}」

ピク、と抱いた肩が揺れた。

「……進也」

肩に回した手で顎を捉え、柔らかな唇を自分のそれに重ねた。

気持ちの赴くまま愛を確かめ合った後、「ああ、そうだ……」と思いつ出した。

「やべえ、ミツチになんて言ったら」

もしミツチが一葉の事好きだったら、ミツチに対して悪い気がした。勿論渡すつもりは全くないが俺は頭を抱えた。

すると一葉は俺の胸にスリスリと顔を寄せて甘い吐息を零しつつ、ふんわりと口角を上げた。

「だーいじょうぶ」

「へ？」

「ミツチは、今頃あの娘とラブイチャよ」

「ほ？」

……俺は知らなかったが、今厨房にいるミツチと近所の娘さんは菓子屋を始めたあたりから付き合っているらしい。言えよ、もっと早く！

殿下と親しくなったのは、許婚である隣国の公爵令嬢がウチの菓子进行をいたくおきに召したらしくて、直接力ズから説明を聞いたかったからだそうだ。

つまりまあ、なんの障害もなく……。

一年後。

俺は殿下直属の、だけど自由に動かせる隠密として軍に在籍する事となり。たまに隣国へ出張するのがいい息抜きになった。

「浮気したら三倍返しよ」

ニッコリと笑う大事な一葉おくさんに見送られ、道中は魔物を退治しつつ隣国へ荷を届ける。そう、公爵令嬢へ菓子をお届けに……。

「我が国でも『はろういん』？ やりたいのですが……」

そんな未来の嫁の言葉に張り切りすぎているウチの殿下は二つ返事で了承した。

一葉に打診し菓子を流通させ、あとはオレンジカボチャの魔物を倒してジャック・オ・ランタンを作り……。

ウチの国と、隣国で爆発的に「ハロウィン」が流行し、それに伴

い凶悪なオレンジカボチャの魔物は激減して近隣の村からは大層喜ばれた。

そしてどの家庭でも大小様々なジャック・オ・ランタンが飾られ、子供達はトリック・オア・トリートで近所の家を回り、ウチの菓子屋で作られたクッキーや飴をキャツキヤと喜んで食べている。

どうしてハロウィンなのか、どうしてカボチャなのかとか理由を聞かれたことはない。楽しければいいそうで、大人も子供も好き勝手に過ごしている。

異世界菓子屋、大成功だ。

「今までお祭りらしいものなかったし、元々騒ぐネタさえあれば楽しめるこの世界の人だもん、絶対成功すると思ってた」

一葉は胸を張って次のイベントのプランを帳面に書き留めていた。第一子をおんぶ紐で背負い、お腹の中には宿ったばかりの大事な子宝が。つわりがないとはいえ、やたらパワフルな奥さんにはもうちょっと落ち着いてもらいたい……。――

「馬鹿言わないでよ。この世界に私が色をつけていけると思っただけで、たまたまなく気持ちがいいのよ？ 胎教よ、胎教」

「そうですよシンヤさん。カズは好きなことをしていたほうが体調がいいようだし」

「シンヤが心配する気持ちは分かります。けれど僕は生き生きとしている顔を見ている方がより一層惚れ直すというか何というか……」

……

「やだあ、ミツチさんたら……」

「あなたが可愛いから悪いんです」

「……」

「……」

ミツチは近所の娘さんと婚約中。目の前でイチャイチャと始められ、堪らず一葉とそそくさ退散した。

俺と一葉の寝室のベッド横にあるベビーベッドへ、おんぶで寝てしまった子供をそつと横たえ、二人で飽きることなく見つめる。

出来ればこのまま……と思うが、第一子出産後休むことなく第二子を授かったとあつては自重も仕方が無い。

何より遠い（？）異世界の地でこうして家庭を築く事ができ、幸せを噛み締める事が俺にとって――。

「ん、なあに？」

「いや。幸せだなと思ってさ」

「あら偶然ね。私もそう思ってたわ」

そうして、すやすや寝る我が子の前で口付けを交した。

”Happy Halloween!”

否定と現実と温もりと。(後書き)

てことで！。一話目はなるべく色を消し二話目は自分全開
鶏 庭子でした
当たった？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9774x/>

ハロウィン企画「男女三人異世界物語」@妄想部

2011年11月1日19時00分発行